



2018年9月16日

ガラテヤ 2

さあ、皆さん、ガラテヤ人への手紙2章を開けてください。一緒に御言葉を通して、旅を続けていきましょう。

先週、私たちは、神と人の前で、自分自身が真実であること、うそ偽りがないことの重要性について話してきました。

たとえ、周りの皆から猛攻撃を受けたとしても、真実で正しいことをしっかりと守っていく事は大切です。

私たちは、それを、「**揺ぎ無い完全性**」と呼んでいます。

皆さん、何か物が上手く造りあげられた時、私たちは、英語では、「**構造の完全性**」と言います。

皆さん、数週間前、日本を襲った台風や地震について、考えてみてください。

非常に優れた「**構造上揺るがない完全性がある**」の建物は、損なわれず影響を受けませんでした。

多くの物が、崩れ落ち、吹き飛ばされてしまいましたが、構造が完全だったものは大丈夫でした。

普段、毎日の天気は、私たちに構造が完全かどうか、揺るがないか、のテストさせるようなことはありませんが。

けれども、台風や地震といったものが来ると、確かにテストされますし、それは、私や皆さんにも、起こり得ることですね。

危機的な状況の最中に、間違いを修復するには、あまりにも遅すぎる事がよくあります。

そう、そのダメージ、傷は、瞬時に起こるのですから！

私たちは、決して揺るがない完全な信仰から、不安なく、それに耐える事が出来るでしょうか？

若しくは、偽の教えの風にあおられて、吹き飛ばされてしまいますか？

あるいは、諦めてしまい、信仰が崩れ落ち、この世の社会、文化、宗教のプレッシャーに従ってしまいますか。

私は、「グレイテスト ショーマン」と呼ばれる映画の歌「これからは」の歌詞が、とても好きです。

こんな歌です。

*'Cause from then, rubble
What remains
Can only be what's true*

それから、がれきが落ちて きても
残っている物、
それは真実...真実だけが残っている

If all was lost

何もかも無くしてしまったけど、

Is more I gain

*'Cause it led me back
To you (or You)!*

得たものがあるんだから
それが、私を引き戻してくれたから
あなたの所へ、そう、あなたの所へ、戻してくれた。

*From The Greatest Showman (2017)
– Part of a song 'From Now On' (lyrics)*

たとえ、全てを失くしてしまっても、私たちの信仰は残っていますか？

それが、もう一度主に引き戻してくれますか？それとも、主から離れてしまいますか？

このように言うことが出来ますか。「**主は与え、主は取られる。主の御名は、ほむべきかな。**」

ヨブ記 1:21 そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。
【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。」

クリスチャンとして、自分が信じる事が、本当に真実であると、信じていらっしゃるでしょうか？

つまり、別の言い方をしますと「クリスチャンって、お茶のティーバッグのよう。熱いお湯に入れてみないと、皆さん、どんなお茶が出来るかわからない。

そう、使徒パウロは、**揺らぐ事がなく**、妥協する事のない、**完全なる**溢れるほどの信仰の持ち主であることを証明しました。

パウロは、肉体的な迫害や投獄された多くの試練により絶える事を強いられますが、それは神の愛からだとして理解できます。

また、誤った信仰、福音の悪用、律法主義を押し付けるユダヤ教主義に対して、福音を守るように強いられたのも神の愛からでした。それがこの書簡が書かれた目的なのですが。

更に、偽の教会指導者や使徒の偽善者を、大胆に厳しく非難するようにさせられたのも又、神の愛の現れでした。今日は、それについて皆さんと一緒に見ていきましょう。

では、まずガラテア人への手紙2：1—5をお読みします。

ガラテヤ 2:1-5 それから十四年たって、私は、バルナバといっしょに、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。2 それは啓示によって上ったのです。そして、異邦人の間で私の宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人たちには個人的にそうしました。それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。3 しかし、私といっしょにいたテトスでさえ、ギリシヤ人であったのに、割礼を強いられませんでした。4 実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちを奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。5 私たちは彼らに一時も譲歩しませんでした。それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。

この対立については、パウロは使徒の働き15章での事を、指しているように思われます。

それは、パウロとバルナバが、アンテオケの町へ行った時の事。当時、アンテオケは、異邦人教会の中心地でした。

そこは、パウロの母教会。彼が宣教旅行に出かける時は、いつでもこのアンテオケから出発し、そこに戻ってきたものです。

パウロが、アンテオケにいる間、ある人が、名前が明かされていませんが、（このガラテア2：4では「偽兄弟」とあります）エルサレムからやってきます。その人は、異邦人の改宗者が、モーセの律法を守っていないと聞いたので、来たのです。

これらの非ユダヤ人の改宗者（異邦人）が、イエス・キリストにあって、様々な束縛もなく、自由であると言われていました。

そこで、彼らは「一体どのようなになっているのだろう」と、密かに確かめに来るのです。

さてこれらの偽兄弟たちは、異邦人の信者が自由を楽しんでいるのを見て「いやいや、それは正しくない」と言い、自由を認めようとしませんでした。そして、次のように言います。

使徒の働き15：1にこうあります。

「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。
使徒の働き 15:1b

けれども、パウロとバルナバは、強く反論します。ガラテア2：5には、こう書かれています。

ガラテヤ 2:5 私たちは彼らに一時も譲歩しませんでした。それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。

これが、私が先ほどお話しした、「**揺ぎ無い完全性**」ということ。福音の真理を悪の道へと導くことに対し、断固としていかなる違反も許しません、屈することはありませんでした。

さて、パウロは、ガラテア人手の手紙2：2でこう語っています。

ガラテヤ 2:2 それは啓示によって上ったのです。そして、異邦人の間で私の宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人たちには個人的にそうしました。それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。

パウロの目標は、議論となっている異邦人の信者と、モーセの律法との関係を解決する事でした。

もし、解決がうまくいかなかったとすれば、正に初期教会の分裂という結果となってしまったことでしょう。ここで（パウロは、すでに走ったことが無駄にならないためと言っていますね）パウロは、福音の真実が分かっていたということです。

パウロは、福音の真実が分かっていたということです。

真理は、パウロを律法主義と伝統を守るパリサイ人の生き方から自由させてくれました、パウロが元に戻るようなことは、あり得ないことでした。

そこで、パウロは個人的に、主だった人である使徒、おそらくペテロとヤコブとヨハネ、に会います。それは、パウロがこのユダヤ主義を正式に覆す（くつがえす）ため、彼らにもう一度話し、すぐに賛同してもらうのを期待したからです。

ガラテア2：3にこうあります。

ガラテヤ 2:3 しかし、私といっしょにいたテトスでさえ、ギリシヤ人であったのに、割礼を強いられませんでした。

皆さん、どうしてそれが大切なのでしょうか？

なぜなら、テトスは、ちょうど「見本A」のようだからです！テトスは、ギリシア人。それに、パウロによって、キリスト教徒となった改宗者です。テトスはもうすでに救われ、クリスチャンですが、彼は、律法を守ることなしに、割礼を受けることもなしにそうになりました。

パウロが、異邦人の所へ行くとき、彼は異邦人をユダヤ人に改宗させようとはしませんでした。

パウロは、異邦人をユダヤ教主義の伝統から離し、キリストに導こうとしたのです。

パウロは、異邦人の教会で、モーセの律法を教えたのではありません。いいえ、

パウロは、恵みの福音を、神の私たちが値しない好意や親切を、律法では決してもたらしてはくれない義を、イエス・キリストを信じる事を通してのみ頂ける義を、教えたのでした。

ですから、もしテトスが、エルサレムの使徒によって割礼を強いられたのなら、全ての他の異邦人たち、つまりユダヤ人ではない男たちも又、割礼を強いられたことでしょう。

しかしながら、使徒たちは誰も、テトスに割礼を強いる事は無かったのです。主よ、賛美します

ガラテア人への手紙2：6に進みましょう。

ガラテヤ 2:6 そして、おもだった者と見られていた人たちからは、--彼らがどれほどの人たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません--そのおもだった人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。

ユダヤ主義者は、有名人の名前を出し、さも親しげに口にする人々と呼ばれていました。

彼らは、教会へ来てこう言うのです。「我々は、パウロよりももっと権威のあるペテロ、ヤコブやヨハネによって遣わされたんだからね」と。

しかし、パウロはここで「神は分け隔てなさいません。」こと、それに、エルサレムのこれらの指導者たちは、彼らの福音の理解において、特に優秀なわけでもないことを、指摘します。

実に6節では、確かに、パウロの福音に付け加える事は、何一つなかったと、書かれていますね。

では、ガラテア人への手紙2：7に進みましょう。

ガラテヤ 2:7-10 それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。8 ペテロにみわざをなして、割礼を受けた者への使徒となさった方が、私にもみわざをなして、異邦人への使徒としてくださったのです。9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。10 ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧（かえり）みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努（つと）めて来たところです。

そう、これが、使徒の働き15章に書かれているパウロの記述。エルサレムの集会での場面の背景で、起こったことです。（皆さんが、宿題として使徒の働き15章を、読んで下さればと思います。）

パウロの話聞き、主が彼を通して成されている働きを見た後、ペテロ、ヤコブそれにヨハネはこのように言います。「私たちは、ここエルサレムでユダヤ人に宣教していこう。あなた方（パウロとバルナバ）は、異邦人に宣教してください。ただ、貧しい人たちを顧（かえり）みるのを忘れないで」

彼らは、一般的な貧しい人について話していますか？それとも特別な活動について？

さて、パウロは、少なくとも2つの異なる救援献金に関わっていました。一つは、彼のアンテオケにある母教会、使徒11章に書かれています。もう一つは、パウロが建て上げた異邦人教会から集めたものです。

皆さん、これらは、どこへ、又誰のために送られていたか覚えていらっしゃいますか？

それは、ユダヤとエルサレムの貧しい聖徒たちへと、送られていたのです。

でも、これって少し変でしょう。つまり、ペテロとヤコブとヨハネは、次のように言っていることになるからです。「パウロ、我々のことを忘れちゃだめだよ。ちゃんと、献金を送ってね、いい？」

でも、この献金は、パウロが、心からやりたい事、今まで熱心に取り組んできたことでしたね。

さて、ところが、パウロは、異邦人に、モーセの律法やユダヤ教の儀式上の習慣について教えなかったことから、彼は、ユダヤ教主義の人々に、こう言って非難されてしまいます。「あなたの福音は、水で薄めた骨抜き」の「異邦人に友好的な」ものだ」と。

でも皆さん、そうではありませんね。今まで見てきましたように、エルサレムの使徒たちは、パウロが教える事を全て同意し、1つも付け加える事がなかったのですから。

それが、なぜ、パウロがこれらガラテアの人々に全ての教えを伝えたかという理由です。なぜなら、彼らは、事実を無視していたからです。

前に戻りますが、私たちが、前の書簡、第2コリントを学んだ時、これらユダヤ教主義の人々、これらの偽信者が、どのようであったか、多くの事を学びました。彼らは、パウロの名前を、使徒としての神からの召しと権威を、恵みの福音説教を、彼の人格を、さらに外見を、中傷したのです。

そこでパウロは、全体の書簡を書かなくてはなりませんでした。基本的には、自分を守るため、それに自分側の話を伝えるためにでした。

でも、なぜでしょうか？なぜ、これらの裏切り者、偽信者に、好きなように言わせておかなかったのでしょうか？

それについては、少し前の箇所5節に、パウロの答えがあります。**それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。**

皆さん、一度でも伝道者が信用されないものとなると、その説教も信用されなくなるものです。

ですから、パウロはイエス・キリストにある信仰を通して、恵みの福音メッセージを守るために、伝道者である自分自身を守る事で、これらの初めの2つの章を書き始めるのです。

1章においては、パウロのメッセージに神の恵みが宣言されている事と、パウロの生き様が描かれていることが、分かります。

2章においては、パウロの宣教において、恵みが守られていることを既に見てきました。それは、2：1－10にまとめられているように、エルサレムの母教会の前で、そして今、使徒ペテロの前で個人的になされています。

では、続けてガラテア人への手紙2：11－13をお読みします。

ガラテヤ 2:11-13 ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。12 なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。13 そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽った行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。

ユダヤ人の習慣では、共に食事をする人々は、誰とでも特別な間柄があるとされていました。この習慣については、前にお話ししましたが、それは、一体であることを象徴しています。

ですから、ユダヤ人は異邦人と共に食事をするのを禁じられていました。彼らは、大変な偏見主義であり、異邦人によって、自分達が汚されたくはなかったからです。

そこで、ペテロはユダヤの伝統を砕くのです。「異邦人の食べ物を食べる事で」だけでなく、異邦人と一緒に食べる事で、壊していきます。

これは、パウロが次の3章で述べているようにすばらしいことです。[ガラテア3:28](#)にこうあります。

ガラテヤ 3:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。

ところが、悲しいことに、ユダヤ人がエルサレムに来た時、ペテロは突然、異邦人の信者から距離を置いてしまいます。

皆さん、想像できますか？異邦人の人々がこう言うのを「やいペテロ、一体どうしたんだよ？突然無視して、何か気を悪くさせた？何が問題なの？」

皆さんは、そんな経験がありますか？思い当たることなしに、誰か、突然、話してくれなくなり無視されてしまうような。

それって、嫌な気分ですよ。

今日は初めから「揺ぎ無い完全性」について話してきていますが。ここで、私たちはペテロのふとした間違いから、彼の完全性が、どのように偽善に引きずり込まれてしまったかが見えてきます。

初代教会で、ペテロは主要な指導者という地位にあったせいで、バルナバを含め他のユダヤ人信者も又、偽善行為に心を奪われていくのです。

うわあ、これは、新聞の第一面を飾る大ニュースだったに違いありません。

というのは、これがペテロだったからです。ペテロは、イエスのじきじきの弟子の一人ですから。

ペテロ、その人は人間の歴史で、イエス以外に水の上を歩いたたった一人の男

ペテロ、彼は聖霊降臨日に、正に一番初めの福音説教をし、その結果、3千人もの魂を救い、その同じ日に洗礼を受けた人。

ペテロ、その人は、タビタという女の人を死から生き返られた人。

ペテロ、その人は、カトリック教会が、正に最初の信頼できるローマ法王であると公言された人

ペテロ、その人は...イエスが一度、厳しく叱責され、サタンと呼ばれた人

ペテロ、その人は...「イエスを知らない」と、一晩に3度否定した人

ペテロも又、ただの人間。あなたや私と変わらないのです。他人の意見を恐れ、自分の完全性が途切れてしまい、偽善に引っかかるのです。

でも、ユダヤの信者、皆がその日、自分たちの完全性を失ったわけではありません。11節にありますように、パウロは、そのことに対し、隠れてコソコソと言うのではなく、面と向かってペテロに抗議します。「ペテロ、あなたのやっていることに、全く賛成できない」と反対します。

では、ガラテア人への手紙2：14を見ていきましょう。

ガラテヤ 2:14 しかし、彼らが福音の真理についてまっすぐに歩んでいないのを見て、私はみな
の面前でケパにこう言いました。「あなたは、自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生
活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いる
のですか。

こう言ってパウロは、当然のごとくペテロに厳しく叱責します。なぜなら、異邦人が恵みと信仰
を通して神に繋がる事がなければ、教会が、他の小さいユダヤ教の分派に滅らされてしまう時が、
すぐに迫って来るからです。

ペテロが、異邦人から、自分自身をれて離れてしまったとき、信仰によって義と認められる事の
真理を否定していました。というのも、彼はこう言っていたからです。「私たちユダヤ人は、異
邦人と違い、異邦人よりも優れているんだ。」と

けれども、ユダヤ人にしても異邦人にしても、両方罪人、キリストにある信仰により、救われる
のです。

ガラテア人の手紙2：15－16ではこう語られています。

ガラテヤ 2:15-16 私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありま
せん。16 しかし、人は律法の行いによつては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信
仰によつて義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じた
のです。これは、律法の行いによつてではなく、キリストを信じる信仰によつて義と認められる
ためです。なぜなら、律法の行いによつて義と認められる者は、ひとりもないからです。

この個所で、パウロは、この書簡の中心となる重要点を述べ始めます。...それは、キリスト教と
いうのは、イエス・キリスト御一人に置ける信仰によつてのみ義とされるという事です。

私たちは皆、罪を犯します。心の中も、想いの中も、行動も、全てにおいて罪を犯してしまいます。

前に説明した通り、私たちは罪を犯すから、罪人なのではありません。いいえ、罪人だから、罪
を犯してしまうのです。

私たちは皆、神の御前で罪ある者。でも、信頼と信仰とキリストに置くその瞬間、私たちは罪が
ないものと宣言されるのです。

「義と認められること」は、単に「赦し」ではありません。なぜなら、人は、赦されるかもしれませんが、それから、又もや罪を犯してしまうからです。

義と認められるは、「容赦されていること」ではないのです。というのは、容赦されている犯人は、依然として記録されています。一度、有罪と決められれば、決して取り消せません。

ところが、信仰により義と認められる時、私たちの過去の罪は、もはや忘れ去られているのです。

私は、罪を犯したことが、決してないんだ！

最後に、神が罪人を義と認めてくださる。良い人々を認められるのでなく！

「良い人間」と宣言する人が、なぜ義とされないかという理由は、彼らが自分は罪人だと決して認めないからです。

箴言16：18にありますように、本当に「高ぶりは、破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ」のです。

では、ガラテア人への手紙2：17－18に進みましょう。

ガラテヤ 2:17-18 しかし、もし私たちが、キリストにあつて義と認められることを求めながら、私たち自身も罪人であることがわかるのなら、キリストは罪の助成者なのでしょうか。そんなことは絶対にありえないことです。18 けれども、もし私が前に打ちこわしたものをもう一度建てるなら、私は自分自身を違反者にしてしまうのです。

勿論、本当に義と認められると、変えられた生き方をもたらせてくれます。その事は、ヤコブ書2章に、書かれています。

そこで、パウロは、こう言うのです。「へい、ペテロ、もし私たちが異邦人と食事をしたら、罪人ということなの？ 勿論違うね。キリストは、罪人？ いいえ、そうじゃないでしょう。」

それでは、ペテロはなぜ、元に戻り、前に打ち壊したものを立て直し、みっともないことをするのですか？

ペテロ自身が、ここ第2ペテロ2：22で聖書の言葉を引用しているように

2 ペテロ 2:22 彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る」とか、「豚は身を洗って、またどろの中にころがる」とかいう、ことわざどおりです。

すなわち、パウロは、神の恵みに与ったペテロ自身の経験を巡り、言い争っています。ペテロがモーセの律法に戻ってしまう事は、神が彼を通し、彼に成された業を全て否定してしまう事なのです。

では、ガラテア人への手紙2：19－20に進んでいきましょう。

ガラテヤ 2:19-20 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうち

に生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

皆さん、最近の事です、何かひどい罪を犯した犯人が、警察から逃れて、多分この付近の地域にうろうろしているという事で、気を付けるようにと警告されています。

さて、皆さん、ちょっと想像してください。この容疑者をとらえようとした警官に、その男が撃たれ、死んでしまったとします。

そこで、裁判にかけるために、この警官は容疑者の死骸を法廷に連れて行こうとするのでしょうか。

容疑者は、法を侵しましたが、裁判所へ連れていかれないことは、明らかでしょう。

そこです、そこが、大切な点。死が、罪の宣告で終わります。それが、物事の終わりというもの。死が、おしまいにしてしまいました。

イエス・キリストにある信仰に至る前は、私もその通り、罪人だったのです。

けれども、今は私の古い命は、キリストと共に十字架につけられています。罪が消し去られることによって、私は、私を咎（とが）め、死に至らせる律法から解放されているのです。

私は、新しくもう一度生まれました。パウロがこう語っているように、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

皆さん、分かってくださいましたか。イエスは、カルバリーの十字架上で、「私を愛し私のためにご自身をお捨てになった」のです。

十字架上で叫ばれたイエスの勝利、それはヨハネの福音書19：30の「完了した」です。

律法主義は、こう言います。「やれ、やれ、やれ！」って。

（一方）恵みは、こう言います「完了した！」って。

そこで、ガラテア人への手紙2：21は、こう語るのです。

ガラテヤ 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」

恵みの福音というパウロの擁護の答弁は、今日においても、同じくらい極めて重要なものです。

私たちは、何かを福音に付け加える時はいつでも、私たちの為に成されたイエス・キリストの最後の御業を、無意味にしてしまいます。

私は、使徒パウロの模範に対し、主に心から感謝しています。パウロは、完璧な男ではありませんでしたが、「揺るがない完全性」を持ち、いかなる代価を払っても、その確信に固く立つ男でした。

皆さんの事は分かりませんが、私は、その様な信仰を持ちたいのです。

誰も、私と共に行かなくても、私は従いたい！後戻りはできない、そう、後戻りはできません。

直ぐな人の誠実は、その人を導き、裏切り者のよこしまは、その人を破滅させる。

箴言11：3